コウノトリ

ハンス・クリスチャン・アンデルセン　Hans Christian Andersen

矢崎源九郎訳

青空文庫

ある小さな村の、いちばんはずれの家に、コウノトリの巣がありました。コウノトリのおかあさんは、巣の中で、四羽の小さなひな鳥たちのそばにすわっていました。ひな鳥たちは、小さな黒いくちばしのある頭を、巣の中からつき出していました。このひな鳥たちのくちばしは、まだ赤くなっていなかったのです。

そこからすこし離れた屋根の頂きに、コウノトリのおとうさんが、からだをまっすぐ起して、かたくなって立っていました。おとうさんは、かたほうの足を、からだの下に高く上げていました。こうして、見張りに立っているあいだは、すこしぐらい、つらい目にもあわなくては、と思ったからでした。おとうさんは、木でほってあるのかと思われるほど、じっと立っていました。

「巣のそばに、見張りを立たせておくんだから、家内のやつは、ずいぶんえらそうに見えるだろうな」と、コウノトリのおとうさんは考えました。「このおれが、あれのご主人だなどとは、だれも知るまいよ。きっと、ここに立っているように、言いつけられているんだと、思うだろうさ。それにしても、ずいぶんだいたんだろうが！」こうして、コウノトリのおとうさんは、なおも、片足で立ちつづけていました。

下の通りでは、大ぜいの子供たちがあそんでいました。そのうちに、コウノトリを見つけると、その中のいちばんわんぱくな子が、むかしからある、コウノトリの歌をうたいだしました。すると、それにつづいて、みんなもいっしょにうたいだしました。けれども、はじめにうたった子がおぼえていただけを、みんなは、ついてうたっているのでした。

コウノトリよ、コウノトリ、
とんでお帰り、おまえのうちへ
おまえのかみさん、巣の中で
四羽の子供を寝かしてる。
一番めはつるされる、
二番めはあぶられよ。
三番めは焼き殺されて、
四番めはぬすまれよ！

「ねえ、あの男の子たちが、あんなことをうたっているよ」と、コウノトリの小さな子供たちは、言いました。「ぼくたち、つるされたり、焼き殺されたりするんだってさ」

「あんなこと、気にしないでおいで」と、コウノトリのおかあさんは、言いました。「聞かないでいらっしゃい。なんでもないんだからね」

けれども、男の子たちは、なおもうたいつづけて、コウノトリのほうを指さしました。中にひとりだけ、ペーテルという男の子は、動物をからかうのはいけないことだと言って、仲間にはいろうとしませんでした。コウノトリのおかあさんは、ひな鳥たちをなぐさめて、こう言いました。「心配しなくてもいいんだよ。ほら、ごらん。おとうさんは、あんなにおちついて、じっと立っていらっしゃるじゃないの。おまけに、片足でね」

「ぼくたち、とってもこわい！」ひな鳥たちは、こう言って、頭を巣のおくへひっこめました。

つぎの日も、男の子たちが、またあそびに集まってきました。コウノトリを見ると、きのうと同じように、うたいはじめました。

一番めはつるされる、
二番めはあぶられよ！

「ぼくたち、つるされたり、焼き殺されたりするの？」と、コウノトリの子供たちは、たずねました。

「いいえ、そんなことはありませんとも！」と、おかあさんは言いました。「おまえたちは、もう、とぶことをおぼえなければいけません。おかあさんが、おけいこさせてあげますよ。そしたら、あたしたち、みんなで草原へとんでいって、カエルをたずねてやりましょう。カエルたちはね、水の中からあたしたちにおじぎをして、コアックス、コアックス！　って、うたうんですよ。それから、あたしたちはそのカエルを食べてしまうの。ほんとに、そりゃあ楽しいことですよ！」

「そうして、それからは？」と、コウノトリの子供たちは、たずねました。

「それから、この国じゅうにいるコウノトリが、みんな集まって、秋の大演習がはじまるんですよ。そのときは、みんな、うまくとばなければいけませんよ。それは、とってもだいじなことなんですからね。だってね、いいかい、とべないものは、大将さんに、くちばしでつつき殺されてしまうんですもの。だから、おけいこがはじまったら、よくおぼえるようにするんですよ」

「じゃあ、やっぱり、あの男の子たちが言ってたように、ぼくたち、殺されるんだね。ねえ、ほら、また言ってるよ」

「おかあさんの言うことを、よくお聞き！　あんな男の子たちの言うことは、聞くんじゃありません！」と、コウノトリのおかあさんは、言いました。「その大演習がおわったら、あたしたちはね、いくつもいくつも山や森をこえて、ここからずっと遠くの、暖かいお国へとんでいくんです。そうやって、エジプトというお国へ、あたしたちは行くのよ。そこには、三角の形をした、石のお家があるの。先がとがっていて、雲の上にまで高くつきでているのよ。このお家は、ピラミッドといってね、コウノトリなんかには、とても想像がつかないほど、古くからあるものなのよ。それから、大きな川もあるわ。その川の水があふれると、そのお国はどろ沼になってしまうの。そしたら、そのどろ沼の中を歩きまわって、カエルを食べるのよ」

「うわあ、すごい！」と、ひな鳥たちは、口をそろえて言いました。

「そうですとも。とってもすてきよ！　一日じゅう、食べることのほかには、なんにもしないんですもの。そっちではね、あたしたちが、そんなに楽しく暮しているのに、このお国では、木に青い葉っぱが一枚もなくなってしまうのよ。ここはほんとに寒くってね、雲はこなごなにこおって、白い小さなぼろきれみたいになって、落ちてくるんですよ」おかあさんの言っているのは、雪のことだったのです。けれども、これよりうまくは、説明することができませんでした。

「じゃあ、あのいたずらっ子たちも、こなごなにこおってしまうの？」と、コウノトリの子供たちは、たずねました。

「いいえ、あの子たちは、こなごなにこおって、くだけたりはしま

せんよ。でも、まあ、そうなったもおんなじで、みんな、暗いお部屋の中にひっこんで、じっと、ちぢこまっていなければならないの。それなのに、おまえたちは、きれいなお花が咲いて、暖かいお日さまのかがやいている、よそのお国をとびまわっていることができるんですよ」

やがて、幾日か、たちました。ひな鳥たちは、もうずいぶん大きくなったので、巣の中で立ちあがって、遠くまで見まわすことができるようになりました。コウノトリのおとうさんは、毎日毎日、おいしいカエルや、小さなヘビや、そのほか、見つけることのできたごちそうを、かたっぱしから持ってきてくれました。それから、おとうさんは、子供たちに、いろんな芸当をやってみせました。そのようすは、ほんとにゆかいでした。頭をうしろへそらせて、しっぽの上においてみせたり、小さなガラガラのように、くちばしで鳴いてみせたりするのです。それから、いろんなお話もして聞かせました。それは、ぜんぶ沼のお話でした。

「さあ、おまえたちは、とぶおけいこをしなきゃいけませんよ」と、ある日、コウノトリのおかあさんが、言いました。そこで、四羽のひな鳥たちは、屋根の頂に出なければなりませんでした。まあ、なんて、よろよろ、よろめいたことでしょう！　みんなは、羽で、からだのつりあいをとっていたのですが、そうしていても、いまにもころがり落ちそうでした。

「いいかい、おかあさんをごらん」と、おかあさんが言いました。

「こんなふうに頭をあげて。足は、こんなふうにおろすんですよ。一、二！　一、二！　これができたら、世の中へ出てもだいじょうぶよ」それから、おかあさんは、いくらかとんでみせました。つづいて、子供たちもぶきっちょに、ちょっとはねあがりましたが、バタッと、たおれてしまいました。まだ、からだが重すぎたのです。

「ぼく、とぶのはいやだよ」一羽のひな鳥は、こう言って、巣の中へはいこんでしまいました。「暖かい国へなんか、行かなくったっていいや！」

「じゃあ、おまえは、冬がきたら、ここで、こごえ死んでもいいの？　あの男の子たちがやってきて、おまえをつるして、あぶって、焼き殺してしまってもいいの？　なら、おかあさんが、男の子たちを呼んできてあげましょう」

「いやだ、いやだ」と、そのコウノトリの子供は言って、ほかのひな鳥たちと同じように、また、屋根の上をはねまわりました。三日めには、すこしでしたけれども、みんなは、ほんとうにとぶことができるようになりました。こうなると、もう自分たちも、空に浮ぶことができるだろう、と思いました。それで、みんなはじっと浮んでいようとしましたが、すぐに、バタッと、落っこちてしまいました。ですから、また、あわてて羽を動かさなければなりませんでした。

そのとき、男の子たちが下の通りへ集まってきて、またうたいだしました。

「コウノトリよ、コウノトリ、とんでお帰り、おまえのうちへ！」

「ぼくたち、とびおりてって、あの子たちの目玉を、くりぬいてやっちゃいけない？」と、ひな鳥たちは言いました。

「いけません。ほうっておきなさい」と、おかあさんは言いました。

「おかあさんの言うことだけ聞いていれば、いいんですよ。そのほうが、ずっとだいじなことなんですよ。一、二、三！　さあ、右へ

まわって！　一、二、三！　今度は、えんとつを左のほうへまわって！　――ほうら、ずいぶんじょうずにできたじゃないの。いちばんおしまいの羽ばたきは、とってもきれいに、うまくできましたよ。じゃ、あしたは、おかあさんといっしょに、沼へ行かせてあげましょうね。そこへは、りっぱなコウノトリの家のひとたちが、幾人も、子供たちを連れてきているんですよ。だから、その中で、おかあさんの子が、いちばんりっぱなことを、見せてちょうだいね。からだをまっすぐ起して！　そうすりゃ、とってもりっぱに見えて、ひとからもうやまわれるんですよ！」

「だけど、あのいたずらっ子たちに、しかえしをしてやっちゃいけないの？」と、コウノトリの子供たちは、たずねました。

「どなりたいように、どならせておきなさい。おまえたちは、雲の上まで高くとび上がって、ピラミッドのお国へとんでいくんでしょう。そのときはね、あの男の子たちは寒くって、ぶるぶるふるえているんですよ。それに、青い葉っぱも、おいしいリンゴも、なに一つないんですよ」

「でも、ぼくたち、しかえしをしてやろうね」と、子供たちは、たがいにささやきあいました。それから、またおけいこをつづけました。

　通りに集まる男の子たちの中で、いつもあのわる口の歌をうたっているよくない子は、いつか、いちばんさいしょにうたいはじめた、あの男の子でした。その子は、まだほんの小さな子で、六つより上には見えませんでした。でも、コウノトリの子供たちにしてみれば、その子は自分たちのおかあさんや、おとうさんよりも、ずっとずっと大きいのですから、年は百ぐらいだろうと思っていました。むりもありません。コウノトリの子供たちに、人間の子供や、おとなの人の年が、どうしてわかるはずがありましょう。

　コウノトリの子供たちが、しかえしをしてやろうというのは、この男の子にたいしてだったのです。だって、この子がいちばんさいしょにうたいだしたのですし、それに、いつもきまって、歌の仲間にはいっていたのですから。コウノトリの子供たちは、心からおこっていました。そして、大きくなるにつれて、だんだん、がまんができなくなりました。それで、とうとう、おかあさんも、しかえしをしてもいい、と、約束しなければならなくなってしまいました。でも、この国をたっていく、さいごの日まで、してはいけない、と、言い聞かせたのでした。

「それよりも、今度の大演習のときに、おまえたちがどんなにやれるか、まずさきに、それを見ましょうよ。もし、おまえたちがうまくできなければ、大将さんがくちばしで、おまえたちの胸をつつくんですよ。そうすりゃ、あの男の子たちの言ったことが、すくなくとも一つは、ほんとうになるじゃないの。さあ、どうなるかしらね」

「わかりました。見ていてよ！」と、コウノトリの子供たちは言って、それからは、ほんとうにいっしょうけんめい、おけいこをしました。こうして、毎日毎日、おけいこをしたおかげで、とうとう、みんなは、軽がるときれいにとぶことができるようになりました。ほんとに、楽しいことでした。

　やがて、秋になりました。コウノトリたちは、このわたしたちの国へ冬がきているあいだ、暖かい国へとんでいくために、みんな集まってきました。それは、たいへんな演習でした！　コウノトリたちは、どのくらいとべるかをためすために、いくつもいくつも、森

や村の上をとばなければなりませんでした。なにしろ、これからさき、長い長い旅をしなければならないのですからね。あのコウノトリの子供たちは、たいそうみごとにやってのけましたので、ごほうびに、「カエルとヘビ」という、優等賞をいただきました。それは、いちばんよい点だったのです。そして、このいちばんよい点をもらったものは、カエルとヘビを食べてもいいことになっていました。ですから、このコウノトリの子供たちも、それを食べました。

「さあ、今度は、しかえしだ！」と、みんなは言いました。

「そうですとも！」と、コウノトリのおかあさんは、言いました。

「おかあさんがね、いま頭の中で考えたことは、とってもすてきなことなんですよ。おかあさんは、ちっちゃな人間の赤ちゃんたちのいる、お池のあるところを知っているの。人間の赤ちゃんたちはね、コウノトリが行って、おとうさんやおかあさんのところへ連れていってあげるまで、そこに寝ているんですよ。かわいらしい、ちっちゃな赤ちゃんたちは、そういうふうに、そこに寝ていて、大きくなってからは、もう二度と見ることのない、楽しい夢を見ているのよ。おとうさんやおかあさんは、だれでも、そういうちっちゃな赤ちゃんをほしがっているし、子供たちは子供たちで、みんな、妹や弟をほしがっているんですよ。さあ、あたしたちは、みんなでそのお池へとんでいって、わる口の歌をうたわなかった子や、コウノトリをからかったりしなかった子のところへ、かわいらしい赤ちゃんをひとりずつ、連れていってやりましょうね。みんな、いい子なんですから」

「でも、あの子には？　ほら、さいしょに歌をうたいはじめた、あのいじわるの、いたずらっ子には？」と、若いコウノトリたちは、さけびました。「あの子にはどうするの？」

「そのお池には、死んだ夢を見ている、死んだ赤ちゃんもいるのよ。だから、あの子のところへは、その死んだ赤ちゃんを連れていってやりましょう。あたしたちが死んだ弟を連れていけば、あの子は、きっと泣き出しますよ。けれど、あのいい子にはね、おまえたちも、きっと忘れてはいないでしょう、ほら、『動物をからかうのは、いけないことだ』と、言ったあの子ね、あの子のところへは、弟と妹を連れていってやりましょう。それから、あのいい子はペーテルという名前だから、おまえたちもみんな、ペーテルという名前にしてあげましょうね」

　こうして、おかあさんの言ったとおりになりました。それから、コウノトリは、みんなペーテルという名前になりました。こういうわけで、いまでも、コウノトリは、ペーテルと呼ばれているんですよ。

青空文庫情報

底本：「マッチ売りの少女　（アンデルセン童話集※［＃ローマ数字3、1-13-23］）」新潮文庫、新潮社
　　1967（昭和42）年12月10日発行
　　1981（昭和56）年5月30日21刷
入力：チエコ
校正：木下聡
2020年3月28日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（https://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

コウノトリ

ハンス・クリスチャン・アンデルセン　Hans Christian Andersen

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

著者　　矢崎源九郎訳
URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/